



館長だより

山形県産業科学館

令和 6 年 8 月 2 9 日 (木)

発行 館長 加藤 智 一

校歌

今日、8月24日生まれの有名人を検索していたら、音楽家では瀧廉太郎（明治12年）、高嶋ちさ子（昭和43年）がヒットしました。瀧廉太郎氏の名言「微力ながら日本語の歌詞に作曲した曲を世に出すことによって、日本歌曲の発展に寄与したい。」そして名曲『荒城の月』（明治34年）があります。それから百数十年、高嶋ちさ子氏は「自己満足ではだめなんです。自分たちの演奏を聴いてくれたお客様の喜ぶ顔が見たい。そこに自身の喜びを見出せるようにならないと。」とおっしゃっております。西洋音楽の黎明期に活躍された瀧先生は、今の高嶋さんたち演奏家の音楽を聴いて、そして高嶋氏の発言をお聞きになってどう思われるのでしょうか。

さて、話を戻して、「荒城の月」と言えば、忘れていけないのは作詞された土井晩翠先生です。土井先生は仙台のご出身ですが、山形県内でも伝統校の校歌には土井先生の手によるものが多数現存しております。山形工業高校とか、米沢工業高校とか。加えて米沢工業高校の校歌を作曲したのは、あの山田耕筰先生ですから、すごい取り合わせです。

おおむね校歌と言えば経験上、その学校の立地条件と教育理念が織り込まれているものがほとんどかと思いますが、山形工業高校の校歌には、「あまねく知識を世界に求め」とか「共存共栄」とか、米沢工業高校の校歌には、「工業報国」とか、大正時代の日本が目指していた理想や世相が反映されていて、なかなか興味深いものがあります。

ところでみなさんは、先日の全国高校野球甲子園大会の決勝戦、ご覧になりましたか。優勝された京都国際高校のみなさんおめでとうでございます。京都国際高校の前身は、京都韓国学園。野球部創部は1999年だそうです。全国選手権京都大会一回戦、その時の対戦相手は京都成章高校。0対34で京都韓国学園は大敗します。その時京都成章で2塁を守っていたのが、現在京都国際で監督を務める小牧監督です。甲子園大会の優勝校の校歌が、韓国語で斉唱されるのを聴いて、私は、ようやく野球もここまで来たかと。戦後77年経ってようやくこんな時代が到来したかとうれしくなりました。お相撲の世界ではとくに、モンゴル出身の力士が横綱なのに、高校野球の国際化はいつになったら訪れるのかと内心思っておりました。創部から25年で優勝を成し遂

げた京都国際の皆様、そして小牧監督、改めておめでとうございます。皆さんの偉業が、今後の高校野球の未来に、日韓の友好に大きく寄与することを心から願っております。

校歌ではありませんが、過去のわだかまりや憎しみ、現在も続く民族紛争。同じ人間なのに分かり合えない気持ちや先入観。誰がわるいわけでもないのに、正義の名のもとに傷つけあう隣人。せめて世界中の子ども達が、希望を失わない世界をあきらめないように、応援歌のつもりでお聴きください。そしてお歌いください。「世界がひとつになるまで」どうぞ。

『世界がひとつになるまで』

作詞：松井五郎 作曲：馬飼野康二

まぶしい陽ざしが 君の名前を呼ぶ
おんなじ気持ちで 空が見えるよ
つらいとき ひとりきりで 涙をこらえないで
世界がひとつになるまで ずっと手をつないでいよう
あたたかいほほえみでもうすぐ 夢がほんとうになるから

はじめて出逢った あの日 あの世界から
いろんな未来が 歩きはじめた
なぜみんな この地球に 生まれてきたのだろう
世界がひとつになるまで ずっと手をつないでいよう
思い出のまぶしさに負けない とても素敵な夢がある

世界がひとつになるまで ずっと手をつないでいよう
あたたかいほほえみでもうすぐ 夢がほんとうになるから
世界がひとつになるまで ずっと手をつないでいよう
思い出のまぶしさに負けない とても素敵な夢がある

世界がひとつになるまで ずっと手をつないでいよう
ときめきは宝物いつでも 愛が明日を守るから

